

徐嗣伯『風眩方』攷

永塚 憲治

公益財団法人 研医会 研医会図書館

『風眩方』と題する本がある。主に六朝時代、南朝の斉で活躍した徐嗣伯の作と称しており、発行書肆や刊記などの刊年を推定させるような事項に関しては一切記されていないが、料紙や印刷などから判断するに、管見では清末から民国期に出版されたものであると推定される。巻首に逸書である「張太素齊書」と題して徐嗣伯の伝が2葉、「風眩方/齊東陽徐 嗣伯 叔紹」と題して以下本文巻が全9葉ある。その他の特徴としては、玄・弦・眩・絃・敬・驚・殷・匡・竟・鏡・恒・貞・徵・癥・慎の全15種の宋の諱字欠筆があり、李元・林從・公茂・李元・李正・李中・宋生・余才の全8種の刻工名がみえる。

徐嗣伯の伝記は、蕭子顯の『南齊書』巻二十三 列伝第四と李大師・李延寿の『南史』巻三十二 列伝第二十二に立てられているが、『太平御覽』巻七百二十三 法術部四 医三にも「齊書曰……」とあり、『張太素齊書』と「齊書曰……」はほぼ同一であり、民国25年から26年にかけて刊行された四部叢刊三編所収本刊行以前に流布本であった鮑崇城系統刊本（嘉慶二十三年序刊鮑崇城本・光緒十八年刊李氏學海堂本・光緒二十年刊積山書局石印本）と、誤刻と思われる『張太素齊書』が「問」に作るに対して『太平御覽』が「問」に作っている異同以外は一致した。『張太素齊書』が、『太平御覽』巻七百二十三に引く「齊書曰」以下を底本にしていたように、『風眩方』本文は、『千金要方』の「風眩」に、ほぼ同文が見られることから、基本的に『千金要方』「風眩」を底本していると考えられる。『風眩方』という内題は、『千金要方』「風眩」の冒頭にある注の「前卷既有頭面風方，風眩不當分出。思邈蓋以此是徐嗣伯方，不可以餘方相思雜，故此特立風眩方条，專則徐氏方■焉。……」に依ると推定される。また『張太素齊書』が、「齊書曰」を「張太素齊書」に改め、ほぼそのまま『太平御覽』を引用しているに対して、『風眩方』本文は先に冒頭の注を削去し「徐嗣伯曰，余少承家業，……」以下を引用して本文としている。では本文の底本は『千金要方』のどの刊本なのであろうか。『千金要方』の現伝のテキストには、大きく分けて宋改本と未宋改本の系統がある。『風眩方』の本文を見た所「白朮」に記述が統一されていることから、底本は宋改を経た系統の刊本に基づくと考えられる。また『風眩方』の条文は、主治証を筆頭に次いで方剂名を記している。宋版系刊本以外の諸刊本は、基本的に方剂名が筆頭として記されている。本文の特徴からいって『風眩方』本文は、宋版系刊本を底本としていると考えられる。そこで、南宋刊本と江戸医学館模宋本及び中国で修刻再印された江戸医学館模宋本（以降、模宋本系と呼ぶ）と比べた所、模宋本系と一致した。

ではこの『風眩方』は、輯本として作られたものであろうか、影宋本や模宋本等といった宋版の旧態を保った本を装った一種の偽書であろうか。『太平御覽』の引書目である「經史圖書綱目」に南斉を扱った史書である『蕭子顯齊書』と『沈約齊書紀』の間に佚書である『張太素齊書』を発見しそれに基づいたと思われるが、張太（大）素の著した『齊書』は北斉の史書であり、南斉の人物である徐嗣伯の伝に「張太素齊書」と題するのは不適切で、輯本としてはあり得ない失考をしていること。また底本である模宋本系刊本が欠筆していない場合でも、上記の避字がある場合は必ず關いているということ、同様に刻工名も底本と対応しておらず、姓名或いは字であることがわかる二文字の刻工名だけを模宋本系刊本から集めていることなど、欠筆・刻工名は、一見して分かり易い特徴なので、それによって幻惑されることを期待しての強調だと推察される。このようなある意味稚拙な偽書が刊行されたのは、影宋本の流行にみられるような、清末民国期の古書蒐集熱が背景に有り、そのブームの中で日本伝来の善本旧書が注目されたことに原因があったと推定される。